



Title	哲学がまた動きだした
Author(s)	鷺田, 清一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 11-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

哲学がまた動き出した

鷲田清一

〈哲学〉というもののイメージがちょっと変わってきた。

哲学といえば、西洋からこの言葉が伝わってきてからずいぶん長く、ふだん人間が考えないような深遠なことがらについて考える、浮世離れした思考というイメージが定着してきた。ある時代には、哲学をすると自殺するとすら言われたものである。そういう暗いイメージ、重いイメージはなかなか根づよくて、わたしが大学に入った頃は、専門課程に進学すると、まず最初に、大学で哲学を勉強すると就職がたいへんだから、覚悟をしておくように、と指導教官から言われたものである。

以前、私立大学の哲学科に勤務していた頃、新入生に専攻の志望理由を書いてもらったとき、こんな回答をよせた学生がいた。「暗いのが好きだから。南無阿弥陀仏」。それが80年代の半ば頃から、ちょっと事情が変わってきた。バブル全盛の時代ということで広告関連の企業がずいぶん好調だったということもあってか、企画会社の求人が突然増えた。哲学科出身の学生というのは一風変わった発想をするから広告コピーなんかをやらせたらよいというわけだ。が、蜜月も束の間、バブルの崩壊とともにまた就職不況がやってきた。

就職はむずかしいにしても、哲学そのものは一昨年あたりから小さなブームになりつつある。それも学術書というよりは入門書のたぐいが流行している。「ソフィーの世界」がベストセラーになり、「わたしはだれ？」という問いが流行ったのが、一つのきっかけだったのだと思う。「ボキャブラ天国」の時間枠に、こんどはなんと「哲学」のバラエティ番組が入った。

理由はいろいろ考えられる。バブル景気の終焉とともに、世の中全体がなんとなく「地に足つけて」といったムードに覆われたこともある。老人介護や不登校の問題が相当に深刻化しつつあることもある。サリン事件と阪神大震災という、すさまじい人災と天災がほぼ同時に発生して、心のケアなどが問題になったこともおそらくあるだろう。

が、もっと根の深いところで、時代がかつて西洋人が「哲学」と呼んだような思考を求めだしているということがあると思う。時代の困難が、いまでも「哲学的」になりつつあると言ってもよい。超高齢化社会、失業、アダルト・チルドレン、

性差別、セクシュアリティの揺らぎ、家族の危機、公共性の再構築、民族紛争、環境汚染、臓器売買、遺伝子レベルでの生命操作、宗教的狂信などというふうには、自然との関係、人びとの共存、そして「生きがい」やアイデンティティといった個人の存在根拠をめぐって、そのもっとも基礎的な次元で、解決の道筋がすぐには見えないような難問を突きつけられている。〈わたし〉とはだれか。正義とは、倫理とはなにか。国家とは、民族とは、性とはなにか。老いとは、子どもとはなにか……。これらのそれこそ哲学的な問いに正面から向きあわずには済まされないようなさまざまな困難が、社会の根っこに食い込んでいる。

もちろん、これは日本社会だけのことではない。政治や経済の問題だけでなく、生活や文化のさまざまな次元で、問題がグローバルになってきている。だから「哲学」の誕生の地である西洋社会でも、戦後、哲学の〈死〉が哲学者自身によって宣告されたはずなのに、こんどは「哲学カフェ」や「哲学相談所」、「哲学カウンセリング」の活動が目立つようになってきている。

ある意味でこれは、哲学の原点回帰と言えないこともない。哲学の父とされるソクラテスは死刑になる直前まで議論をしたが、みずからは一冊の著書も遺さなかった。かれが実践したのは、他人の問いかけを受けとめ、投げかえし、相手がみずから事柄の筋道（ロゴス）を見いだすのを促すという、「産婆術」と呼ばれる対話法である。哲学の本質をロゴスを分かちあうこと（ダイアローグ）と考え、会話を社交と教養の基礎と考えてきた伝統をもつその西洋社会で、いま、哲学カウンセリングの試みとして哲学が衣をあらたにしようとしているのだ。

日本では、身のまわりの困難を、理を尽くして議論し考えるよりも、議論以前のところで、気くばりで解決するというやり方がなんとなく身についているところがある。死とは、家族とは、性とは、正しさとは……といった問いについて「哲学的」に考えようとするときに、ディスカッションの作法をうとんじる傾向のあったこの国では、同時に、言葉というものが共同生活のなかでもつ意味について突っ込んで考えておくことこそが必要なのではないかと思う。せっかくの思考がふたたび、建前やお題目に終わってしまわないために。

（『聖教新聞』1997年9月13日）